
吾妻鏡を読むために (42)

東大寺造営と佐々木高綱の評価

伊藤 一美

はじめに

『吾妻鏡』文治5年6月4日条に、以下のように記されている。「佐々木左衛門尉参入す。則ち北面広庇に召し御対面あり。東大寺仏殿柱已下材木、周防国柚出し、殊に精誠を致すの由きこしめし及ぶ所なり。汝ただに軍忠を竭すのみならず、すでに善因に赴く。尤も神妙の旨仰せらる。高綱申して云く。重源上人しきりに相ひ催さる。よつて去月18日、御柱15本河尻に沙汰付しおはんぬ。このほか15本、早く柚を出すべきの由、代官に示し付すと云々」。

この日、御家人佐々木高綱は頼朝から大倉御所へ招請される。京都在住の高綱は前日に鶴岡八幡宮塔供養の導師通納言法橋観性を伴って上鎌してきた所であった。

佐々木高綱は、東大寺造営用材木を周防国の柚から15本を川出したことにつき頼朝へ報告する。さらに15本を現地代官に命じたことをも言上する。これらによって頼朝からは各別の御意をかけられたのだ。

だが現実問題として、このようにすんなりと建造資材の調達ができていたわけではなかったのである。今回は『吾妻鏡』が佐々木高綱をなぜほめちぎるような表現を行ったのか、このことを考えてみたい。

佐々木高綱と周防国

佐々木高綱(『尊卑分脈』③宇多源氏野木・定綱弟)と周防国の関係はいかなるものだったのだろうか。伊藤邦彦氏によれば、周防国では文治3(1187)年11月から建久5(1194)年6月頃まで、佐々木高綱が「国行事」や「奉行」として東大寺の材木調達を行っていたと指摘される(『鎌倉幕府守護の基礎的研究 国別考証編』岩田書院2010)。

『吾妻鏡』文治3年11月10日条の記事からみれば、既に文治2年段階に重源上人から「東大寺棟木」(長さ13丈)を「周防国柚採」することを要請されていたことが伺われる。具体的には『吾妻鏡』建久6(1195)年3月12日条に、「同(文治)2年丙午4月10日、始めて周防国に入り、料材を抽んで採り、柱礎の構えを致し、土木の功を企つ。柱1本を載せるの車、牛120頭に駕し牽かしむの由なり」に注目したい。

さらに小林剛氏によれば「東大寺造立供養記」にも、同年4月10日に大勸進(重源上人)以下10余人と宋人陳和卿、番匠物部為里、桜島国宗らが始めて周防の柚に入部したとある(小林剛『俊乗房重源の研究』有隣堂1980)。文治5(1189)年とされる9月8日付源頼朝書下(東大寺文書・『鎌倉遺文』補遺①90号。同文書『鎌倉遺文』①261号では賜廬文庫文書で頼朝書状写とされ文治3年に比定。上杉和彦氏は文治4年に比定「国家的収取体制と鎌倉幕府」歴史学研究657号1994)によれば、佐々木高綱は東大寺修復への志を実現できる者と頼朝